

# 子育てにおける母親の意識変容

## —自己評価への影響要因—

大 谷 彰 子

### 1. 目的

女性にとって多様な生き方、働き方が出来る社会の施策のひとつとして、2015年に「女性活躍推進法」が策定され、女性がライフスタイルを選択できる様になると共に、育児と仕事を両立することが求められるようになるなど、ここ数十年で、子育てに関する環境は大きく変化している。第一に、夫婦が子どもの人数や産む、産まない、その時期の「選択の変化」、第二に、働き方が複雑になり大部分の母親が職に就き家庭生活のルールを大きく書き換えた「仕事の変化」、第三に、子どもは“役立つ”存在から“守るべき”存在になるといった「子どもの役割の変化」である（シニア・J 2015）。多産短命の時代には、女性が人生を育児（繁殖）に費やしていたが、少子長寿の時代には、一人のおとな個人として成長し自己実現を目指す行動指針を取るようになっている（柏木 2013）。柏木ら（1994）は、「子どもが新しい経験や役割に出会う中で認知・人格・社会的あらゆる面で発達していくのと同様に、おとなもまた、新しい経験に出会い新しい役割をとることの中で発達する」という生涯発達的観点から「親の発達」を捉えている。女性は主体者として「妻・母」という立場を選択する前に、就労などを通じてフロービーク（挑戦目標を設定し、その活動に没入しフィードバックをもたらし、統制を加えることができる高揚感）を経験し、「無制限の自己実現」を経験している者も多い（Csikszentmihalyi · M 1996）。徳田（2002）は、子育て経験を「獲得と喪失」という2つの側面から捉え、育児をすることによってポジティブな情緒的経験がもたらされる一方で、自分の時間や自由といった“個人としての自己”的喪失の可能性があると指摘している。そして、母親にとって子どもを産み育てる経験は、相反する価値や評価を同時に経験し、それを自己の経験として受け入れ統合するプロセスであると述べている。このように、この時期には結婚・出産までに形成してきた個としてのアイデンティティと、新たに母親になることによって獲得されるべき母親アイデンティティが、しばしば葛藤を引き起こすことが指摘されている。個としてのアイデンティティが、乳幼児期からの重要な他者との数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得されるのに対して、母親アイデンティティは母親役割の反映として獲得されるアイデンティティである。この両方を自己の中でどのように両立、調和させ、統合していくかは、現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではない。母親は、子どもと共に生きることを喜びとする本能的愛他感情と、どこまでも一個の主体として自分の思いを貫こうとする自己矛盾の両義性の中で、「育てる者」として心理的に成熟していくことが求められる。一方、現在は育児への肯定的な感情に繋がる乳幼児との接觸経験が少なく（花沢 1992）、乳幼児への好意感情や育児への積極性などの「親準備性」が十分に育ちにくい環境にある。子育て期の母親は、母親自身や重要な他者の影響を受け、自分自身を評価しながら母親役割を獲得し、アイデンティティを構築していくプロセスにある（寺薙 2013）。母親のアイデンティティは、周囲のまなざしの中で変化させられ、最終的には母親が自らに注ぐまなざしの中でも、また変化させられる（ダニエル 2012）のである。しかし、母親として、他者からのまなざしを受ける前に、母親に影響を与える他者になる経験や女性が母親に変容していく様を直接学ぶ機会が得にくく、母親アイデンティティを獲得する際に、自己の中で葛藤が起きる者もいる。

これまで、女性が母親になることに伴う人格の発達や変容については、山口（1997, 2001, 2003）が、親という存在になることによって、その個人には親としての役割や意味が付与され、社会的にも親としての態度や行動を要求されるようになるといった親になる過程を「親同一性」という視点から検討をしている。また、柏木ら（1994）は、「育児は育自」と言われていることを取り上げ、育児経験による母親の変化を検証し、「育児」は、柔軟さ、自己制御、視野の広がり、運命・信仰・伝統の受容、生き甲斐、自己の強さといった人格発達、成熟に至る営みであると述べている。そして、母親役割を肯定的に評価することが、母親の心理的な発達を促進する（西田 2000）ことが明示されている。また、牧野ら（1990）は、育児期の女性を対象に、育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連性を分析し、育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見出している。これまで国内で行われてきた育児不安の研究においても、専業主婦の母親に育児不安が高いことが指摘されており、育児感情と就労形態が密接に関連している様子がうかがえる（長津・真下 1998）。一方で、専業主婦の在宅時間は縮小の一途をたどっており（伊藤ほか 2005），社会的活動の増加と対応している。西田（2000）は、社会的活動の魅力を、家族役割ではなく個人として活動できることと、そこで得られる質量共に豊富な社会的ネットワークをあげ、母親達は、社会的活動に参加することで自分の能力を発見し、成長する体験を持つことで自信を強め充実感と生き甲斐を見出しているとしている。

そして、母親意識の尺度についても様々な研究がなされている。大日向（1988）の自分自身が母親であることを肯定的または否定的に捉える母親役割受容に関する「母性意識尺度」、土肥ら（1990）の母親が子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度を測定する「母親役割達成感尺度」、寺薙ら（2015）は、子どもの世話や発達を促すかかわりといった直接的なかかわりと、子どもの生活費の管理といった間接的なかかわりについて測定する「子育て期母親役割尺度」、大橋ら（2010）は、育児期の親性を子どもへの認識と自己への認識（親役割の状態と親役割以外の状態）の2側面3下位領域として捉え、「育児期の親性尺度」を作成している。また、柏木ら（1994）は、「親となる」ことによって生じる人格的・社会的な行動や態度に関する変化についての「親の発達尺度」など、親になることに伴って親がどのように変化するのかを問うている。

これまでに、母親意識や子育てに伴う不安感、育児感情と就労形態との関係などについての検証は多くなされている。しかし、母親意識に影響を与える属性・社会との繋がり等、多様な要因との相関を扱った研究は少ない。近年の女性の社会進出や親世代の多様な価値観から子育て環境や親の役割が変化し、従来の母親役割を超えて子育てをすることが求められる社会になってきている。母親（主体者としての個人+育てる者）としての成熟を当の母親たちは如何に認識しているのか、その背景にある様々な影響を与える要因を探ることは意義深いと考える。そこで本研究では、女性のライフコースが多様になっている現代社会において、主体者としての母親意識の変容と自己評価、そこに影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2-1 対象者

NPO 法人ママの働き方応援隊に所属する母親（教育機関や高齢者施設、企業などにおいて乳幼児ふれあい体験を行う母親）を対象に、Web 上でのアンケート調査を依頼した。回答率は、会員 2702 名中 820 名（30.3%）であった。アンケートは 100% 有効回答であった。

## 2-2 対象者の属性

対象者の属性は、30歳代が74.1%，40歳代が18.0%，29歳以下が6.8%である。子どもの数は、2人が46.7%，1人が30.5%，3人が19.0%，4人以上が3.8%，第一子の年齢は、3～5歳が45%，1～2歳が23.4%，小学生が20.2%，0歳が6.0%，中学生以上は5.4%である。最終学歴は、大学卒52.9%，短大卒16.6%，専門学校卒15.5%，高校卒9.1%，大学院卒5.0%であり、直近の国勢調査2010年の30歳代の統計（高校卒40.7%，短大・高専卒25.2%，大学・大学院25.2%）と比較すると高学歴である。現在の働き方は、専業主婦が42.2%，育休・産休中が17.4%，パート・アルバイトが16.6%，フルタイムが14.0%であり、平成30年版男女共同参画白書の専業主婦率35%より高いが、有業率は育休・産休中を含めると52.6%と全国平均と近い割合となっている。世帯年収は、400～600万円が25.1%，600～800万円が22.6%，200～400万円が12.6%，800～1000万円が11.7%，1000万円以上が8.7%であり、厚生労働省「平成28年国民生活基礎調査概要」のほぼ全国平均に近い世帯年収である。

## 2-3 調査時期

2018年10月～11月の期間に実施した。

## 2-4 分析方法

本研究でのアンケートは、兵庫県立大学の野津隆志教授と協同で作成したものである。子育て感としての質問項目は、先行研究において開発された母性意識尺度（大日向1988），育児期の親性尺度（大橋・浅野2010），親になることの発達尺度（高橋・高橋2008）の質問項目から採用し、表現に若干の変更を加え作成した。それぞれの質問項目への回答は、「大変思う：5点」「少し思う：4点」「どちらでもない：3点」「あまり思わない：2点」「全く思わない：1点」の5件法で回答を求めた。点数が高いほどその項目の達成感が高いことを示すものである。また、表1の「子育てでの成長」と「母親意識」の相関分析はIBM SPSS Statistics 25.0を用いKendallの相関係数と有意確率（両側）を表記した。

## 2-5 倫理的配慮

アンケートの実施に際して、NPO法人ママの働き方応援隊に研究の趣旨や個人情報の遵守などを説明し、内容を検討し承認を得て行った。Web上のアンケートには、調査の目的・倫理的配慮を記して無記名とし、回答はコンピュータで統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答しづらい項目については、「答えられない」の選択肢を追加したことを明記した。

# 3. 結果と考察

## 3-1 母親意識の自己理解

「母親意識」について5件法で回答を求めた結果が図1である。「大変思う」と「少し思う」を合わせた結果が90%以上であった項目が、「子どもの笑顔や寝顔、しぐさを見ての喜び」99.5%，「人間的成长の実感」93.5%，「母親であることが好き」93.5%，「母親としての充実感」91.7%であった。母親たちは子どもに愛情を持ち、子育ての喜びと母親としての自分を受容し変容を肯定的に捉えた項目が上位を占めた。

それ以外の項目は、「大変思う」と「少し思う」を合わせた結果が75%以下で、「大変思う」が最頻値でなかったため、図2~8に項目別の結果を示している。

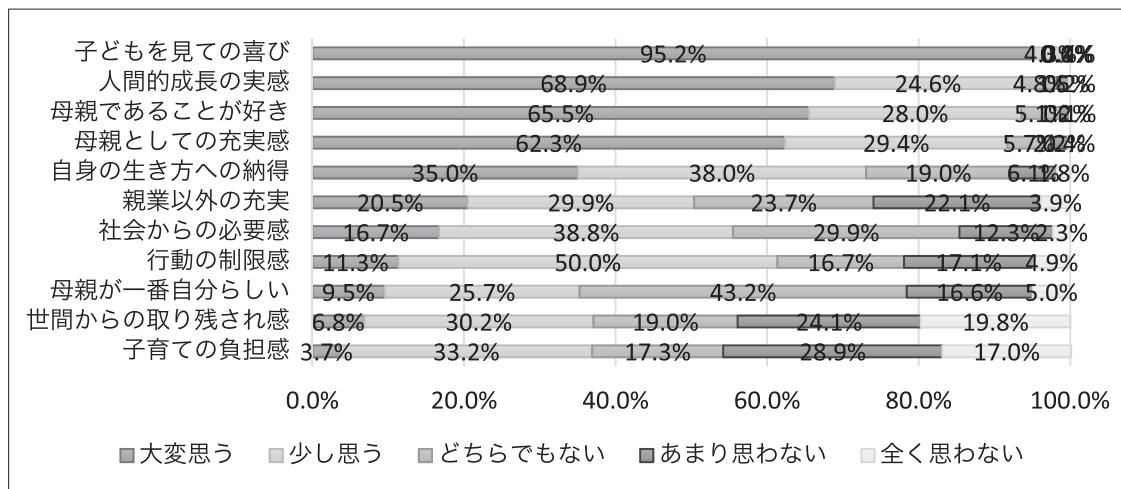


図1 現在の母親意識の認識

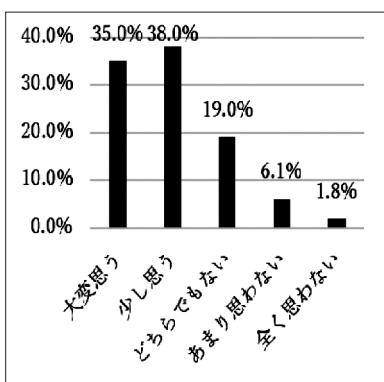


図2 自身の生き方への納得

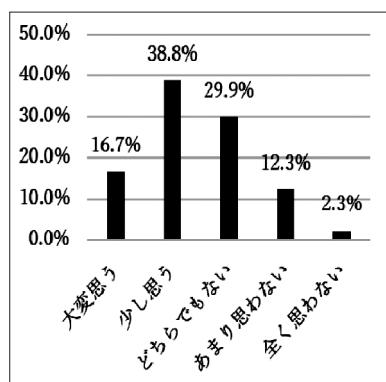


図3 社会からの必要感

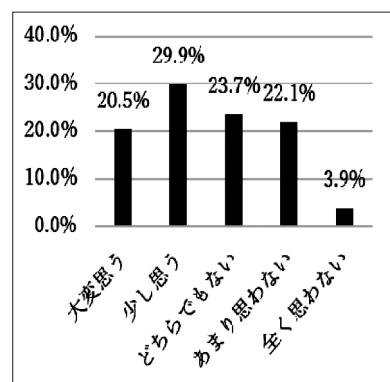


図4 親業以外の充実

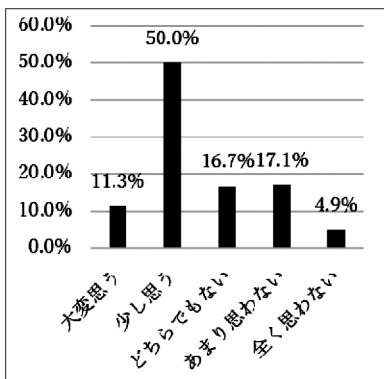


図5 行動の制限感

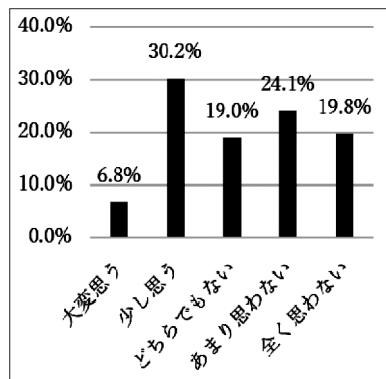


図6 世間からの取り残され感

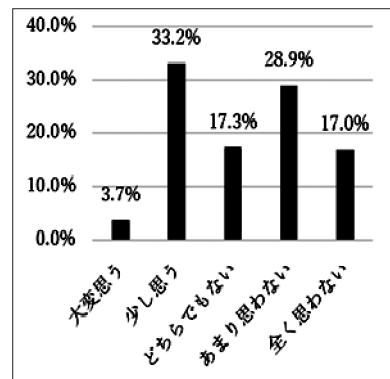


図7 子育ての負担感

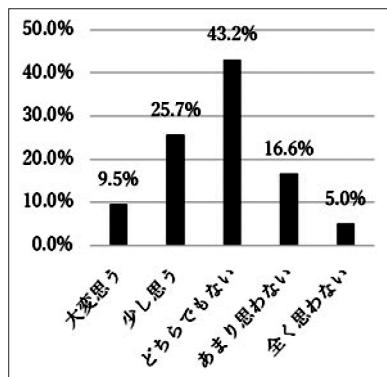


図8 母親が一番自分らしい

図2「自身の生き方への納得」と図3「社会からの必要感」のグラフは、左寄りの山型を描いており、自身の生き方を肯定的に捉え社会からも必要とされ、関係も築けていると認識している母親が多数であった。一方、図5「行動の制限感」、図6「世間からの取り残され感」、図7「子育ての負担感」の3項目は母親であることのネガティブ項目であるが、全て「少し思う」が最頻値となっている。中でも「行動の制限感」は「大変思う」と「少し思う」の合計が61.3%であり、母親は子育てで、不自由さと閉塞感を感じている。また、「世間からの取り残され感」と「子育ての負担感」はM字型のグラフになっており、「少し思う」が最頻値であるものの、そう感じていない母親と二極に分かれる結果となった。子育てに関して、母親達は母親役割であることが好きで充実感や成長を感じているものの、行動は制限され社会からの疎外感を感じており、母親であることには肯定的、否定的両面があると両価的な捉え方をしている。図8「母親が一番自分らしい」という母親アイデンティティに関する項目での最頻値は、「どちらでもない」43.2%であり、「大変思う」と「少し思う」の合計35.2%、「あまり思わない」「全く思わない」の合計21.6%より多数を占め、母親とそれ以外のアイデンティティの両方を自身の中に構築している母親がいる一方。両方のアイデンティティ葛藤の状況にある者もいると推察する。そして、母親が一番自分らしいと「あまり思わない」16.6%（136人）、「全く思わない」5%（41人）と、母親以外のアイデンティティを重視し、母親アイデンティティの構築や受容ができていない者も認められた。

### 3-2 子育てでの成長実感要因としての「母親意識」

母親が成長を実感する要因としての「母親意識」の項目と「子育てでの成長実感」の相関係数と有意確率(両側)を表したものが表1である。

表1 「子育てでの成長実感」と「母親意識」の相関

	子育てでの成長	平均
母親としての充実感	0.360 ***	4.51
母親としての自分好き	0.285 ***	4.58
社会からの必要感	0.265 ***	3.55
生き方受容	0.255 ***	3.98
親業以外の充実	0.211 ***	3.41
母親としての自己受容	0.154 ***	3.18
行動制限	-0.078 *	3.46
子育ての負担感	-0.053	2.78

\*\*\* p<0.001    \*\* p<0.01    \* p<0.05

「母親としての充実感」( $r=.360$ ,  $p<.001$ ) や「母親としての自分好き」( $r=.285$ ,  $p<.001$ ), 「母親としての自己受容」( $r=.154$ ,  $p<.001$ ) といった母親役割を肯定的に受容した項目が上位を占め、正の相関が

認められた。また、「社会からの必要感」( $r=.265$ ,  $p<.001$ ), 「親業以外の充実」( $r=.211$ ,  $p<.001$ )といった社会の一員としてのアイデンティティに関する項目にも正の相関が認められた。子育ての成長実感には、母親役割が充実していることにより母親である自身を受容していることと、社会の一員として親業以外も充実していることの両方が必要であることが示唆された。現代においては母親という一つのアイデンティティのみで生きていくことの難しさを表している。

一方、「行動制限」( $r=-.078$ ,  $p<.05$ ), 「子育ての負担感」( $r=-.053$ ,  $p>.05$ )といった子育てに関するネガティブな項目と「子育てでの成長実感」の間には、ほぼ相関は認められなかった。母親の感じる育児ストレスは母親アイデンティティの獲得にネガティブに関与する（山下 2016）といった研究も見られるが、本研究では「子育ての不安感」や「行動制限」などの否定的要因は「子育てでの成長の実感」とほぼ無関係で大きなマイナス効果をもたらすものではなかった。

### 3-3 母親になったことでの意識変容の認識

「母親となってご自身にどのような変化がありましたか」といった母親になっての変容に関する認識項目の結果を一覧に示したものが図9である。

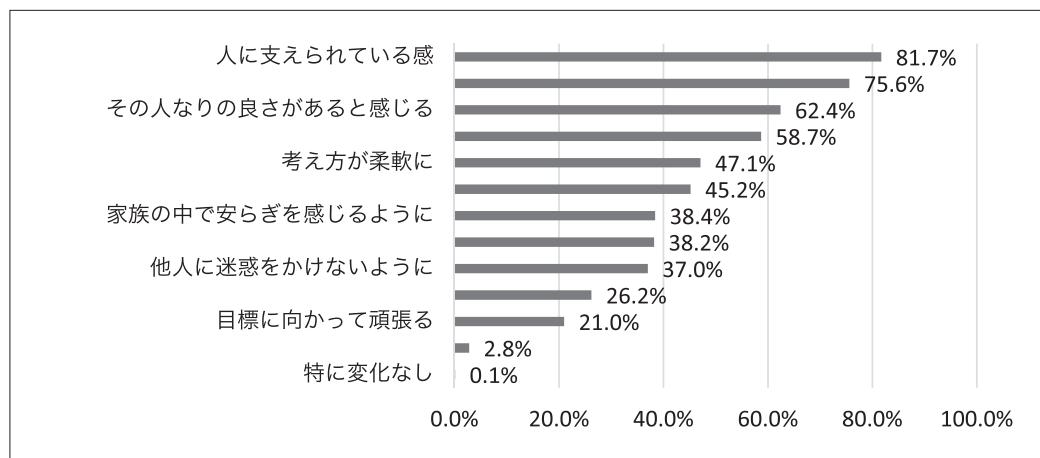


図9 母親になったことでの意識変容の認識

1位「いろいろな人に支えられていると感じるようになった」81.7%, 2位「自分の親が自分をどのように育ててくれたのか考えるようになった」75.6%であり、母親は育児で起こる様々な問題から子育ては一人ではできないと感じており、問題解決の方法を探ったり、その際に感じた気持ちなど自身の育てられ方を振り返っている。そして「どのような人にもその人なりの良さがあると感じるようになった」58.7%など、子育てを通して周囲の人に感謝と理解を示し、自身の現在置かれている環境について考える機会を得ている。子育てをすることで、周囲の環境との関わりが増加し、視野の広がりや他者受容に繋がっており、関係性の理解に関する変容が上位を占めた。また、育児で赤ちゃんや他者との良好な関係を築き、様々な問題に対応するため、「考え方方が柔軟になった」47.1%, 「我慢強くなった」38.2%, 「他人の迷惑にならないように気をつけるようになった」37.0%, 「自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと考えるようになった」26.2%, 「目標に向かって頑張れるようになった」21.0%といった周囲の環境や課題に合わせ、自身の考え方や行動を柔軟に対応する能力の成長を実感している。また、母親になったことで「特に変化無し」と回答した母親は1人のみであった。母親になるということは物理的な世話や時間の増加だけではなく、母親自身の生き方、考え方、行動、周囲との関係など変容が迫られおり、母親自身もその変化を認識している。

### 3-4 「社会との繋がり」や「就労形態」による母親意識の差異

ボランティアや子育てサークルなどの「社会との繋がり頻度」や「就労形態」などの「社会との関係」と母親意識を比較し、その結果を5件法の平均値で示し有意確立（両側）とともに表したもののが表2である。

表2 母親意識と社会との繋がりや就労形態

	項目	ポジティブ項目									ネガティブ項目			
		母親としての自分好き	人間的成長の実感	子どもを見ての喜び	母親としての充実感	母親が一番自分らしい	親業以外の充実	社会からの必要感	生き方への納得	平均値	子育ての負担感	世間からの取り残され感	行動の制限感	平均値
社会との繋がり頻度	週3回以上	4.68	4.75	4.97	4.63	3.19	3.82	3.81	4.21	4.26	2.69	2.60	3.30	2.86
	週1~2回	4.57	4.62	4.93	4.52	3.17	3.26	3.50	3.96	4.07	2.79	2.83	3.47	3.03
	2週間に1回以下	4.43	4.33	4.93	4.42	3.03	3.00	3.23	3.49	3.86	2.93	2.81	3.64	3.13
	有意確率	***	***	***	*	***	***	***	***		*	*		
就労形態	フルタイム	4.54	4.60	4.96	4.50	3.08	3.91	4.06	4.19	4.23	2.68	2.81	3.28	2.92
	パート	4.62	4.62	4.98	4.53	3.25	3.62	3.53	4.00	4.14	2.61	2.71	3.33	2.88
	育休・産休中	4.63	4.64	4.94	4.64	3.29	3.42	3.78	4.25	4.20	2.87	2.62	3.48	2.99
	専業主婦	4.55	4.55	4.93	4.45	3.19	3.05	3.20	3.74	3.96	2.82	2.92	3.57	3.10
	有意確率			*		***	***	***	***					

\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05

濃いグレーは、「社会との繋がり頻度」「就労形態」ごとの最高値、薄いグレーが最低値である。○は「社会との繋がり頻度」「就労形態」を合わせての最高値、△は最低値である。「社会との繋がり頻度」の比較では、ポジティブ項目の全てで「週3回以上」が最高値であり、「2週間に1回以下」が最低値であった。「社会との繋がり頻度」とポジティブ項目では、「子どもを見ての喜び」以外の全ての項目に有意差が認められ、「社会との繋がり頻度」が高いことが、母親意識の向上に密接に関連するといえる。ネガティブ項目では、「子育ての負担感」「行動の制限感」が「2週間に1回以下」が最高値、全ての項目で「週3回以上」が最低値であった。

「就労形態」の比較では、ポジティブ項目8項目のうち「母親としての自分が好き」「人間的成長の実感」「母親としての充実感」「母親が一番自分らしい」「生き方への納得」といった母親としての自己受容や自己成長の実感に関する5項目において、「育休・産休中」が最高値であった。そして、「親業以外の充実」と「社会からの必要感」の社会の一員としての意識に関する2項目が、「フルタイム」が最高値であった。ポジティブ項目の最低値は、8項目中6項目が「専業主婦」、ネガティブな3項目では、「世間からの取り残され感」と「行動の制限感」が「専業主婦」が最高値であった。「子育ての負担感」においても母親としての時間が一番確保されているであろう「専業主婦」2.82は、「フルタイム」2.69よりも子育てを負担に感じる結果となり、子育てを一人で引き受けた責任の重さが負担感を増幅させていると推察する。

「ポジティブ項目」の「平均値」で、「社会との繋がり頻度」と「就労形態」ごとの平均値とを比較すると、社会との繋がりの「週3回以上」4.26が最高値、2位が「フルタイム」4.23であった。最低値が「2週間に1回」3.86、下から2番目が「専業主婦」3.96であり、「就労形態」よりも「社会との繋がり頻度」が母親意識をポジティブに捉える力に影響を与えることが示唆される結果となった。また、各項目の相関においても「社会との繋がり頻度」により多くの有意差がみられる結果となった。「社会との繋がり頻度」と「就労形態」の両方を合わせての結果として、「母親としての自分が好き」4.68、「人間的成長の実感」4.75といった母親役割の肯定的受容に関する2項目は「週3回以上」が最高値、「親業以外の充実」3.91、「社会からの必要感」4.06といった社会の構成員アイデンティティに関する2項目は、「フルタイム」が最高値であった。そして、「母親としての充実感」4.64、「母親が一番自分らしい」3.29、「生き方への納得」4.25といった母親アイデンティティの確立に関する3項目が最高値だったのは、「育休・産休中」であった。「育休・産休

中」は、育児に専念しながら社会の一員として戻る場所が保証されているという帰属感と安心を享受できる環境にあり、その限定された時間が母親意識の醸成に貴重な期間であるといえる。

一方、「ネガティブ項目平均値」では「2週間に1回以下」が最高値、2位は「専業主婦」であり、最低値は「週3回以上」、2位は「パート」、3位「フルタイム」となった。ネガティブ項目の結果から、社会との繋がり時間が多いことは、ネガティブ思考の抑制に繋がることが示唆された。

### 3-5 母親としての自己評価

「あなたが母親であることに点数をつけるとすれば何点ですか（100点満点）」に対する回答を10点ごとに集計した結果が図10である。平均が66.2点、最低点0点、最高点100点、最頻値が50点、2番目に多かったのが80点であった。眞榮城ら（2011）の2ヶ月～5歳児の母親を対象とした母親の「満足度」の自己評価（n=1273名）の平均も66.41点であり、ほぼ同じ結果であった。

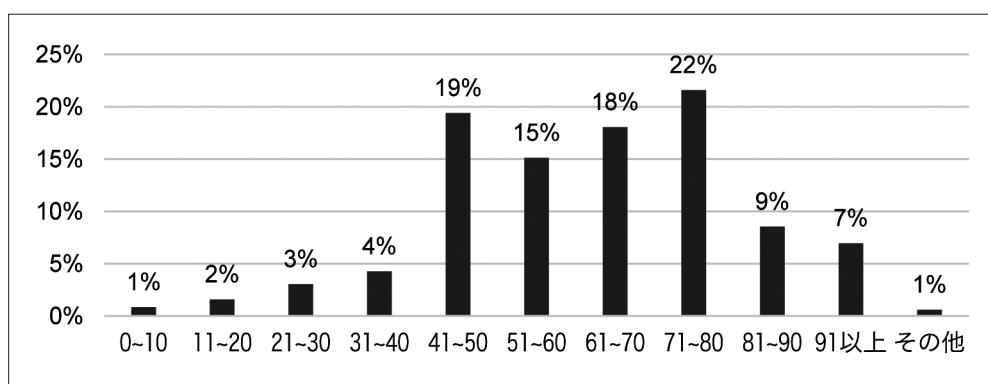


図10 母親としての自己評価分

平均値から見ると、母親としての自身を及第点であると認識していると捉えられる一方で、最頻値が50点、60点以下の母親が44%おり、母親であることに自信が持てず母親アイデンティティを確立しにくい者もいると推察する。そして、結果を「属性」ごとに集計し70点以上であった項目をグラフにしたもののが図11、「母親意識」ごとに集計し70点以上であった項目をグラフにしたもののが図12ある。

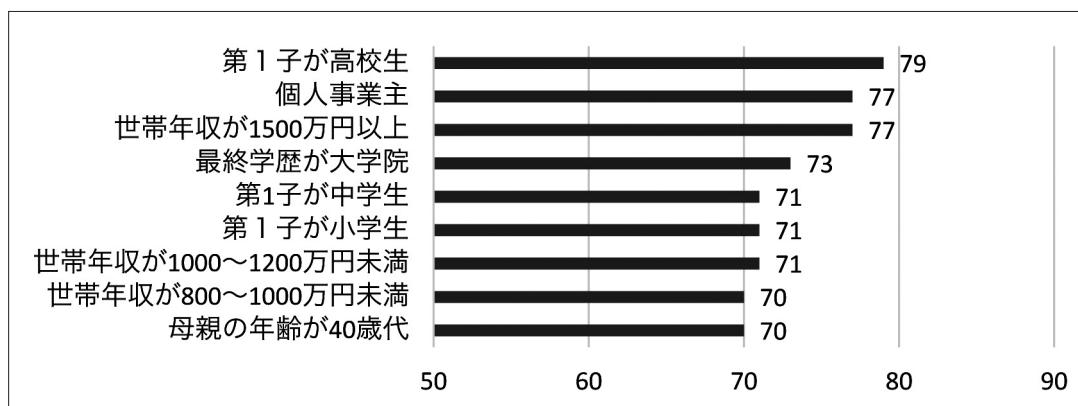


図11 母親の自己評価と属性

「属性」の中で母親としての自己評価が1番高かったのは、「第1子が高校生」79点（n=9）であった。0歳児（n=49）は68点と平均を上回っており、出産は母親としての自己評価を高める経験であると推察さ

れる。しかし、1~2歳（n=192）と3~5歳（n=369）になると64点に下がり、小学生（n=166）、中学生（n=21）が71点と、子どもの年齢が上がるほど自己評価が高くなる結果であった。幼児期の子どもは、母親への依存度が高く手がかかる時期であるため、親の育児に対する負担やストレスも多いと考えられる。そして、小中学生の児童期、高校生やそれ以上の青年期と子どもが成長するにつれ、手を掛ける時間は減少し、子どもの成長が母親に自己有用感を与え自己評価の上昇に影響を与えると推測する。

働き方においては、「個人事業主・自営業」（n=22）が77点、「フルタイム」（n=115）が69点、「育休・産休中」（n=143）67点、「パート・アルバイト」（n=131）66点、「専業主婦」（n=346）64点であった。就労に対する責任意識が強く、主体的な労働意識が母親としての自己評価も高めている結果となった。

世帯年収は、「1500万円以上」（n=19）77点、「1200~1500万円未満」（n=16）68点、「1000~1200万円未満」（n=36）71点、「800~1000万円未満」（n=96）70点、「600~800万円未満」（n=185）67点、「400~600万円未満」（n=206）66点、「200~400万円未満」（n=103）65点と、年収が高いほど自己評価もほぼ高い結果となった。

最終学歴では、「大学院」（n=41）73点、「大学」（n=434）67点、「短大」（n=136）と「高校」（n=75）65点と、学歴が高いほど自己評価も高い結果であった。高学歴化は、専門知識や技能の習得だけでなく、どのようなことをしたいか、なにに達成感を抱くかと行った動機付けと達成感も変化させるといった女性の心理に影響を与える（永久・柏木2000）が、母親としての自己評価にも好影響を与える結果となった。また、「母親の年齢」に関しては、50歳代の母数は8名であるため参考値であるが、「50歳代」（n=8）が80点、「40歳代」（n=148）70点、「30歳代」（n=608）65点、「20歳代」（n=56）64点と、年齢の上昇とともに自己評価も上昇している。「子どもの人数」に関しては、「1人」（n=250）67点、「2人」（n=383）65点、「3人」（n=156）68点、「4人以上」（n=31）69点と「自己評価」の間には相関は認められなかった。

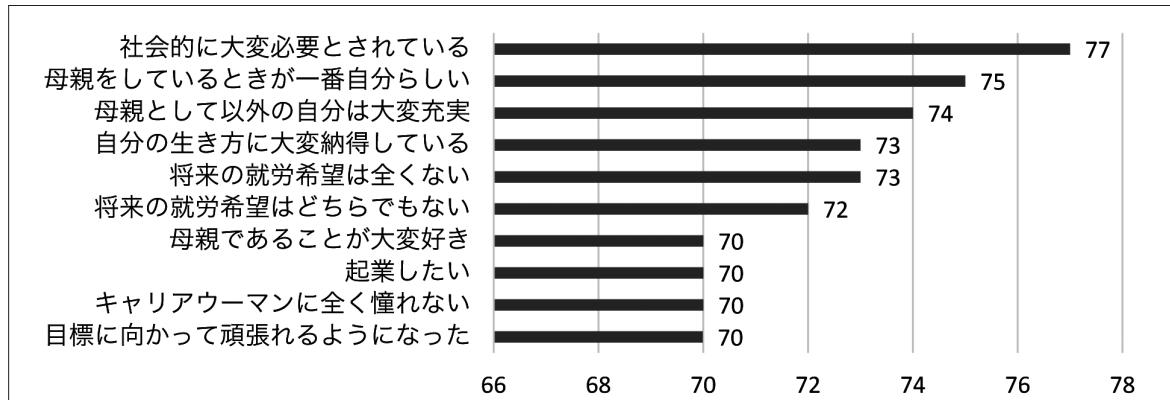


図12 母親意識と自己評価

「母親意識」の中で自己評価が高かったのは、1位「社会に大変必要とされていると思う」（n=137）77点、3位「親として以外の自分は大変充実している」（n=168）74点といった、母親以外の有用感を持ち母親以外の役割アイデンティティを確立している母親であった。また、「母親をしているときが一番自分らしい」（n=78）75点、「母親であることが大変大好き」（n=537）70点といった母親アイデンティティの確立も母親としての自己評価を高める要因であった。将来の働き方に関しては、「将来の就職希望は全くない」（n=12）73点、「どちらでもない」（n=49）72点、「あまり思わない」（n=19）71点、「キャリアウーマンには全く憧れない」（n=70）70点といった、就職希望意識が低く専業主婦をしたいという母親の自己評価が高

かった。一方で、「将来起業したい」(n=186) 70点、「目標に向かって頑張れるようになった」(n=172) 70点といった、前向きな上昇志向を持つ母親も自己評価が高い結果となった。社会での自己実現を目指す母親と、家庭での専業主婦としての母親として育児に専念したいという両極の女性の自己評価が高いという結果であった。

#### 4.まとめ

##### 4-1 母親意識の認識と変容

母親たちは子どもに愛情を持ち、母親であることに充実感、人間的成长を実感し、自身の生き方を肯定的に捉えている。そして、子育てを通しての社会との関わりの増加が、視野の広がりや他者受容に繋がっており、周囲の人に感謝と理解を示し、現在置かれている環境に順応しようと自身を変容させている。その具体的な内容として、自身の考え方や行動を周囲の環境に合わせる柔軟性、自己抑制力、周囲との関係調整力、自己主張力等の能力の成長が認められた。一方で、母親としての自己評価は66.2点、最頻値が50点と母親達は母親役割であることが好きで充実感や成長を感じているものの、社会からの疎外感や閉塞感を感じており、母親であることには肯定的、否定的両面があると捉えている。また、母親は、母親アイデンティティとそれ以外の二つ以上の役割アイデンティティを持っており、自身の中で両アイデンティティをバランスよく保っている母親が多数いると推測される一方で、「母親役割をしている自分が一番自分らしい」と思っていない母親も5人に1人以上いる。母親役割以外の自分が本来の自分であると感じ、母親アイデンティティを受容しづらい母親にとっては、子どもを持つ女性に母親役割を第一義に求める社会では、生きづらさを感じる者もいると推察する。

また、親業以外において充実していると感じているのは50.4%で、半数近い母親は「社会からの必要とされ感」に物足りなさを感じている。母親が一番自分らしいと母親アイデンティティを自身のアイデンティティの主軸においている母親は35%であり、母親アイデンティティとそれ以外のアイデンティティの中庸にいる母親が43%、母親以外のアイデンティティを主軸にしている母親も22%いる。また、子育てに負担や閉塞感を感じている母親は3人に1人以上おり、社会人としての自己実現の喜びを経験した母親たちが、社会との繋がりや仕事を通しての充実感を十分に満たせない中で子育てすることは、母親アイデンティティの葛藤に繋がると推察される。一人の女性として個の確立に向かう「個人化」と社会の一員として成熟する「社会化」の間での心の揺れが、自己評価の最頻値が50点という低い結果につながったひとつの要因と考えられる。

##### 4-2 社会との繋がり

成長実感に繋がった要因として「母親としての充実感」や「母親としての自分好き」「生き方受容」といった母親アイデンティティに関する項目と、「社会からの必要感」「親業以外の充実」といった社会構成員アイデンティティの両方が必要であるとの結果となった。母親たちの社会との繋がりへの飢餓感が母親意識に影響を与えていている。そこには、「フルタイム」などの働き方ではなく、「週3回以上」といった社会との繋がりが母親意識の醸成に効果が高く、ボランティア、子育てサークル等の多様な社会や人との繋がりは、就労形態よりも母親意識の確立に影響を与えることが明らかとなった。また、社会との繋がり頻度が高いことが、ネガティブ思考の上昇を抑制することが示唆された。アイデンティティ形成の際に、様々な人との関わりを

通し、他者から見た自己像を取り入れ社会的な側面から自己を見つめ直す社会的な自己確認と、その社会からのまなざしを受け、内省を繰り返し内面から自己を見つめ直す内面的な自己確認の2つの側面から自己を見出そうとしている。就労の場で一人の女性個人として他者からのまなざしを受けるのではなく、子育てサークルやボランティアで、赤ちゃんと一緒にいる母親としての立場で多様なまなざしを受けることによって母親としての意識が涵養され、母親アイデンティティが確立されていくと考えられる。

#### 4-3 「育休・産休」の効果

「母親であることが一番自分らしい」等、母親アイデンティティの確立に一番効果的な時期は「育休・産休中」であった。出産の感動と赤ちゃんとの絶対的信頼関係、子育てに専念できる期間限定の時間、育児休業終了後に社会の一員として戻るべき場所があるという帰属感と安心感が、母親意識の醸成に効果的であると推察される。「育休・産休中」は、母親としての成長を実感し母親意識が高い一方で、「専業主婦」に次いで自己評価が低かった。新生児や乳幼児の育児での失敗やこれまでの知識では通用しない現実、生活形態や家族関係も変化する中で、自らに与えられた「親」という役割を自己のアイデンティティに取り込もうと模索、苦悩してると推察する。この時期の社会との繋がりで、他者から母親としての自身への肯定的なまなざしを受けることが母親アイデンティティを確立する上で重要であると言える。

#### 4-4 自己評価に与える属性要因

「母親の年齢」「子どもの年齢」「世帯収入」「学歴」全てにおいて、高くなるほど自己評価も上昇する結果となった。「母親の年齢」「子どもの年齢」「世帯収入」については、概ね同時に上昇していくことが考えられるため、相互に影響を及ぼしていると推測されるが、育児経験、人生経験を重ねることが自己受容できることに繋がること、経済的余裕が自己評価の上昇に影響を与えていると推察する。「世帯年収」においては、内閣府（平成26年）の「人々の幸福感と所得について（n=2566）」の報告に「世帯年収が高いほど、幸福感が高くなる傾向」があると記されているが、母親の自己評価においても世帯年収は同様の影響を与える要因であるといえる。「働き方」においては、「個人事業主・自営業」を筆頭に「フルタイム」「育休・産休中」「パート・アルバイト」「専業主婦」の順に自己評価が高くなっている、仕事における責任の重さが自己評価に比例する結果であった。社会の一員としての主体性と責任感、仕事での成功体験が自己肯定感に繋がっており、個人としての自己評価が母親の自己評価にも影響し、向上する要因であることが示唆された。

#### 4-5 自己評価に影響する意識

向上心を持ち起業したいと目標を定め努力する母親と、「母親をしているときが一番自分らしい」「将来就労を希望していない」と家庭で子育てに専念する専業主婦を目指す母親の自己評価が高かった。母親には主体的に「個」としての自己を社会の中で生かそうとする「個人志向性」に重きを置く者と、家事や育児に専念し、子どもの成長や家族の幸せを自身の喜びの中心に据える「家族志向性」に重点を置く者がいる。個人としての能力を大きな社会の中で発揮し認められたいという「自己実現」の尊重と、身近な他者との関係性を重んじ、共存し役立つことで自己効力感を感じる「他者幸福」の尊重である。それぞれに重心を置く割合は違っていても、この二つの視点は、二分法的対立項としてではなく個人の中に両立しており、子どもの成長とともにその比重は変化していくものである。多くの社会と繋がり、様々な母親モデルを見て多様な母親としてのキャリアデザインを学ぶことで、現在自分が置かれている立場や母親役割の意味を理解していくことが肝要である。自分の進むべき道や生き方を自律的に選び取り、自身の生き方に納得していくことが、

母親としての自己評価の向上に繋がる要因である。

今回の研究では、乳幼児ふれあい体験を教育施設等で自身の赤ちゃんと一緒にしている母親を対象に検証したため、社会と繋がろうとする意識が高い母親であったと推察する。今後は、多様な働き方、考え方の母親も対象に比較検証していきたい。また、母親になるとはどのようなことだと捉え、これまで子どもが社会の一員として育つために何をおこない、何を後悔しているのかといった、子育て内容についても検証していきたい。本研究は、日本乳幼児教育学会第29回大会でのポスター発表に、改題と内容に加筆、再検討を加えたものである。

謝辞：本研究を行うに当たり、アンケートを協同で作成していただいた兵庫県立大学 野津隆志教授に、心より感謝申し上げます。また、アンケートに快くご協力いただきましたママの働き方応援隊のママ講師の皆さんにも心よりお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- ・Csikszentmihalyi.M：フロービークス喜びの現象学，1996.
- ・ダニエル・N・スター、ナディア・B・スター、アリソン・フリーランド：母親になるということー新しい「私」の誕生、創元社、2012.
- ・土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫：多重な役割従事に関する研究ー役割従事タイプ、達成感と男性性・女性性の効果ー、社会心理学研究、5, pp137-145, 1990.
- ・花沢成一：母性心理学、医学書院、pp79-85, 1992.
- ・伊藤セツ・天野寛子・天野晴子・水野谷武志編著：生活時間と生活福祉、光生館、2005.
- ・柏木恵子・若松素子：「親となる」ことによる人格発達ー生涯発達的視点から親を研究する試みー、発達心理学研究、5, pp72-83, 1994.
- ・柏木恵子：おとなが育つ条件、岩波書店、2013.
- ・眞榮城和美・繁多進・菅野幸恵・白坂香弥：乳幼児をもつ母親の意識と感情(4)ー子どもに対するネガティブな感情と母親の自己評価との関連ー、2011.
- ・牧野暢男・中原由里子：子育てに伴う親の意識の形成と育児不安ー調査研究ー家庭教育研究所紀要、12, p11-19, 1990.
- ・永久ひさ子・柏木恵子：母親の個人化と子どもの価値ー女性の高学歴化、有職化の資源からー家族心理学研究、pp.139-150, 2000.
- ・内閣府：人々の幸福感と所得について（中長期、マクロ的観点からの分析②）  
[https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0214/shiryou\\_03.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0214/shiryou_03.pdf) 2019/11/03.
- ・長津美代子・真下由佳：夫婦の役割葛藤と育児不安ー乳幼児の母親を対象とした調査からー、群馬大学教育学部紀要、芸術・技術・体育・生活科学編33, p251-260, 1998.
- ・西田裕紀子：成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究、教育心理学研究、48, pp433-443, 2000.
- ・大橋幸美・浅野みどり：育児期の親性尺度の開発-信頼性と妥当性の検討ー、日本看護研究学会雑誌 Vol.33, No 5, pp 45-53, 2010.
- ・大日向雅美：母性の研究、川島書店、pp135-169, 1988.
- ・シニア・J：子育てのパラドックス「親になること」は人生をどう変えるのか、栄治出版株式会社、2015.
- ・寺薙さおり：子育て期の母親役割を支えることの意味と今後の課題、倉敷市立短期大学研究紀要第57号, pp.69-76, 2013.
- ・寺薙さおり・山口桂子：子育て期母親役割尺度の作成、小児保健研究第74巻、第4号, pp491-497, 2015.
- ・徳田治子：母親になることによる獲得と喪失ー生涯発達の視点からー、家庭教育研究所紀要、24, pp 110-120, 2002.

- ・山口雅史：いつ、一人前の母親になるのか？－母親のもつ母親発達感の研究－，家族心理学研究 11, p83-95, 1997.
- ・山口雅史：親同一性を構成する3つの次元－幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造－，家族心理学研究, 15, p79-91, 2001.
- ・山口雅史：母親になる過程を巡って－親になる過程を巡る2人の母親への面接調査－，日本保育学会第56回大会発表論文集, p310-311, 2003.
- ・山下 優実・加藤 陽子・石田 有理：育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響に関する予備的検討－父親の育児行動に対する評価に着目して－，十文字学園女子大学紀要 47, pp25-36, 2017.

